

そんな事を云つて面白がつてゐたのだ。平素あまり自分が生真面目にあつたからでもあつたのだらう。

それにしてもお葉に關係したのはどんな男だらう。お葉のやうな女は、すぐにその男に頼つて了ふ。一度でその男を信じ切つて了ふ。けれどもし、その男が捨てるやうなことであつたならば、もうそれ限り、二度と再び、男と云ふものに關係しなくなる。オド／＼と恐れつばい、疑深かい女になつて了ふものだと思つてゐる。

また階下で、大勢の女の花やかな笑聲が起つた。何となく失望したやうな、そして、又安心したやうな思ひに、深かい息をついた。そして、自分は、下讀をする英語の本をひらいた。

葉すれの音の静かな夜、もう月が上つてゐる。

古暖簾(賞)

水野 仙子

居ない、と断へばそれまでだもの、面會せはすまいと思つた菊川の女將は意外だつた。女中は早速紅緒の

草履を板の間に並べた。意氣に曲げて結んだ帯の女中に導かれて、通つたのは六疊の間、少し陰氣ではあつたが、丸く挾つた窓の竹を通して、青葉が勢よく繁つて居た。間もなく女將が自ら茶菓を運んで來た。

『ま、お敷きなさいましよ』
とわざと増枝が脇に退けて置いた座薄團をすゝめて、改めてお辭義をした。

『毎度前田さんには御最負になります』
などゝも言つた。

初めて此様な場所には足を踏み入れ、初めて此種の女に接した増枝は、習慣上理由もなく對手を蔑む心と、呑まれまいと頭を擡げる性來の勝氣とで、胸は板のやうに硬張つて居た。

『ホ、ほんにねえ、今のお若い方は……』
と吸ひつけて出した煙管を、女將は笑ひながら自分で吸つて白い煙りを吐いた。

『一寸失禮します……あの今直ぐ何しますからね』
言ひ捨てゝ、さう起つて行つた女將の、髪は柄に似氣なく赤く、高い鬚ばかりが油で黒く光つて居た。幾間かを隔て、度々手を叩く音がした。急いで階段

を昇る足音もした。離れらしい後の方からは、絶えず爪弾きの音が洩れて居た。

忘られたやうに、かくしてやゝ暫らくを獨り置かれ増枝は、馬鹿々々しさに幾度か起ち上らうとした。

取り散らした縫物に埋つて、いざたなく居眠つて居た嫂が、やう／＼に歸つた夫に向ける腹立たしげな仕

打ち、それを黙つて見て居る母の時々にくめく眸、煙管の音が唐銅の火鉢に音高く響けば、兄は兄として間の

悪るさに無暗と店の者どもを叱り散らした。身を斜に火鉢の猫板に肘をかけて、眼鏡の大きい父は新聞から

目を放さなかつた。かくした或る夜の有様がふと頭に寫つた。不愉快な家庭を忌むの念は、意久地のない兄

を憎む心と一緒に、陰に陽に、家庭の調和を計つて居る身の愚かさを感ぜしめた。『私がかうして家に

居ればこそ』と、常に兄や嫂の影に心の底で言つて居たことを、口に出して言つて遣りたいやうな氣持ちがし

た。

若い時分のことを反省みて、息子の放埒を叱ることの出来ない父は、其齒痒ゆき腹たしきで、無暗に母に當り散らされる嫁の身を感れんだ。すること爲すと善いこと惡い行爲、すべて一々嫁の肩を持つた。

嫁は圖に乗つて姑を蔑にした。それを口惜しがる母の背に、酒に狂ふた父の手が飛べぬまでも、人前を繕ふ笑顔のうちに激しい暗闘があつた。

姑は息子の道樂をひたすらに嫁の罪に歸した。さうして常に其罪を責めるやうな仕向けをした。増枝はい

つもそれを遮つて居た。現はすに現はされぬ面白くな

さは、母の身體を弱くして其精神を捻ぢさせてしまつ

た。何とも知らぬ味氣なさは常に其胸を襲つて居た。

母を感れむの情に湧き來る涙も、嫂の仕打ちを憎んで居ながら、其場になればそれを蔽隠ふ、不思議な反抗

心に勝てないのを増枝は悲しんだ。

一頻り込んだ飯時の勝手は掃き出されて、臺所には皿小鉢の觸れ合ふ音、帳場の番頭が聲高に新聞の續きものを讀んで居る頃は、煙草入れを腰にさして居た父の姿は早や見えなかつた。古い暖簾の家に一人息子と生れて、大量な祖父に撫でられて育つた身は、廿歳の年に義理で貰つた分家の娘の窮屈さに苦しんだ。逃れて歩く道こそ違へ、今だに筑碁の仲間を渡つて其日を暮して居る。



治休川森口山りっ

て坐る度につく／＼吾身の意久地なさを知るのが常である。兄は妹に手をついて詫びたいやうな気持ちがあった。それと直覺つた妹はまた少なからぬ矜りを感じた。矜りを感じた胸には心身ともに弱い兄を慰むの情も湧いた。

『では今日は歸るんですね？ 必と』
其聲は柔かだつた。
『うゝ、必と歸る……そのなんでも一寸……』
ふと増枝は、さもない時の交情のいゝ兄嫂を思つて不愉快な感じがした。馬鹿々々しいといったやうな感じもした。

『召し上ねな貴女、ねえ旦那、さア』
女がつとにちり出たのには目もくれず
『ぢやあ必となんですね？』
増枝は起ち上つた。

『なんだ歸るの？……』
と目を睜つた兄は、すん／＼起つて行く増枝を見送つて、やがて、
『……御苦勞だつたね』
と聲を落して言つた、

『おやもうお歸りでございますか、あんまりお籠末さまでしたねえ……あの何です、大丈夫今日はお歸し、ますからねえ、御心配なく……ホ、ホ、』
女將の聲に送られて増枝は門を出た。重い／＼壓迫から逃れ出たやうな氣が

らして陰頭を打つた。氣も心も弱い息子は、ふとしたことから暢氣な場所を知つて其處にのみ足を向けるやうになつた。たまさかに歸つた折は殊更に氣づまりな家といふことを痛切に感じた。
増枝は勝氣な女であつた。學費の半分を貰いで居た遠い縁の醫學生を、父母は娘の夫と心で決めて、望んで止まなかつた女學校へも入れて置いた。増枝が鋭敏い頭はいつともなしにそれを覺つて置いた。けれども醫學生は父母が思ふ通りにはならなかつた。若い美しい女は其妻として増枝が家にも連れられて來た。増枝の矜りは傷けられた。父母のやうに失望はしなかつたけれども、少なからぬ侮辱を感じたのは事實であつた。
或年の秋、心臓を病んだ兄の看護によばれてから再び上京は許されなかつたけれども、汽車賃の入つた財布はいつも懷を放れなかつた。さうした機會は無いで布はいつとも懷を放れなかつた。見兼ねて手を出した出入の算盤を放すことは出来なかつた。
諦めやう諦めやうとして二年は過ぎた。隙あるごとに文學雜誌などを漁つて居た頭はいつか其方に傾いて新しい思潮も知つた。筆もとつて見た。折々に起る縁談、そんなことには耳もかきなくなつた。新らしく

燃えたつた上京心は、ともすれば落ち目な家運を白眼に見やうとした。
『あの前田……あの兄様があらでお目にかゝりますからつて……』
足音がと思ふ間もなく、先刻の女中が片膝をついて、顔を上げて居た。
巾の廣い階段の裏の薄暗い廊下を抜けて突き當りのやに敷石のごろ／＼した庭を、簾越しに眺めた一室に女中は導いた。
『増枝、御馳走があるぞ』
入るなり、きちんと坐つた妹を、和めるやうな目をしてかう言つた。其顔をじつと見て、
『兄さん！ 幾日になると思ふんです！』
忿怒の情はむら／＼と押し寄せて、口々に『意久地なし々々』とわめきたてた。
『宜いよ、まあ宜い、今日は歸る、必と歸るよ』
其顔は青かつた。飲めば飲む程青味を増すが其癖で、
『まあ今日は少し緩りして行くさ。おい！』
傍には女が坐つて居た。縞縞に派手な帯を結んで、切れの長い目で増枝を見て居た。
種々な料理は増枝の前に並べられた。賢い妹に對つ

する。軒を並べた瓦斯燈の街を急ぎ足に低目にすぎ、激烈しい香の鼻を衝く病院の裏の近道を抜けた。家に居たとして甲斐のない兄を、何の爲めに自分自身がこんなところまで向ひに來たかを疑ひ乍ら、考へて居るやうで頭は何も考へて居なかつた。

ふと街の賑かさに氣付いて顔をあげた。俾は人をのせて走り、荷馬車は荷をつけて歩いて居る。暮れ方の日は東側の軒並深くさし込んで居た。

半鐘の角から三軒目、金看板の高い倉造りの藥種店と並んで、廂に青く苔蒸した家の、檐低く垂れた暖簾の色は褪めて居た。奥暗い其家を凝乎と眺めて居た増枝は、昔し歸省した或る夜の日記に、『楽しいところと懐かしんで、怡々歸つて來た家庭は、此上はと思ふ程、不愉快なところであつた。』と感情に委せてこんなことを書いたのを思ひ出した。

産 褥

橋 本 菱 水

神奈川縣者といへば案外世評に喧傳されて居る。關内關外に澤山の阿

嬌を有して居る横濱の人で、わざ／＼神奈川まで遊びに行くものもあるといふ。上君の家はこの神奈川にある。少しく在の方で、家は近頃新築したばかりだ。尤も僕等と一緒に中學に通つてた頃は横濱に住んで居た、有名な俠客で、てんで肌合が普通の生徒とは違ふて、喧嘩には嘗て退けを取つた例がなく上級の者も彼の前には尾を巻いて居たが、而し氣質が何處までも捌けて居て、溫柔い生徒には矢張り丁寧に交際して行き、無暗に機鋒を現すのを愚としてる風の男であつたから、單に威光のためばかりでなく、心からその度胸に敬服して居るものも少くはなかつた。

「〇〇ばかりは實際不思議だよ、あんなに權力があつて、それで途で逢ふ時なんか向うから先に帽を取るからな、づない處が第一豪い」

こんな批評が彼に就て、級友の間に交はされた。

上君は三年の時、謫居退校を食つた。大喧嘩をして相手を傷つけたのが原因である。級友は彼の爲に氣の毒に思ふよりも一層深く彼を級から失ふのを惜しく思つた、種々なる意味に於て、彼は級の必要人物であつた、學力の事は置いて聞はず、彼は何物かを級に貢獻する男であつた。赤心、義俠、彼には今時の書生に少い之等の美點があつた、而し同時に随分蠶蠶すべき行爲もあつた。彼の口から聞いた事であるが、彼は十五歳の時一人で藝者買に行つた事である。またブプの子供であつた上、丈けは餘り高くなかつた方であつたから、蒲團の裾が長過ぎ、此度來る迄には蒲團に腰揚げをして置いて呉れ」と云つて來た。所謂我等

には想像にもつかぬ艷事が随分あつた。學校を止めてから尙激しくなつた様子である、而し隔月の同級會には必ず出席し、端艇競争などには何時も夢中になつて我級の聲援をした。凡ての點に於て級思ひな事は驚かす程であつた。

彼の家は屈指の資産家である。彼は退校後暫くして神奈川に建てられた貸家の中の一軒に住ふ事になつた。そして貸家の番でもしながら遊んで食つて居た、何時か美しい妻を連れて街を通つてゐるのに出逢した事があつた。その時は飛白の着物に烏打帽といふ姿であつた。平常姿などは氣取らぬ方である。

此四月吾等は中學を卒業した。僕は上君から祝辭を貰ひ且つ遊びに來いと云はれたので、或る天氣晴朗な日上君といふのを誘つて共に神奈川まで電車で行つた。其途中上君の近狀をよく知れる友に逢つて聞くと、上君の妻がお産をしたといふ。妻があれば子が出来るには當り前だか、これを聞いた時は何だか大に驚くべき事のやうに思つた、自分も俄に大人になつた様な氣がした。

「餘り今日は騒ぐまいぜまだお神さんは産褥を離れないんだらう」

上君が眞面目になつていふ。

「何か嬰兒にお祝ひをしてやらうか、……何がいだらう」

悠んな事を云ひながら二人は、在所から野菜や馬鈴薯や、雜穀やを運搬する荷馬車の通る、溝に沿つた街道を歩いて行つた。溝には塵芥が勝手に捨てられて、所々白茶けた汚い泡沫のつぶつぶが溜り、單純な黄色

い翅の蝶が二三疋あたりを飛んで居た。電車を下りてからも十町餘の道のりである。

上君は心から嬉しさに二人を連へた。嬰兒を悠り見て行つて呉れたま。上君は心から嬉しさに二人を連へた。嬰兒を悠り見て行つて呉れたま。上君は心から嬉しさに二人を連へた。嬰兒を悠り見て行つて呉れたま。

上君の父は彼の身持ちを改めさせる一助と思つて彼に美しき妻を娶つて遣つた。それが已に妻の側から云へば最大の不幸である。彼女によしその美貌を以てしても斯かる夫から永遠の愛が得られるであらうか。

「そりや僕だつて妻は可愛いさ、それに僕を眞實思つて呉れるから尙ほ可愛い。だからあれに悲しい思をさせるのけ濟まぬと思ひはするけれど而し又〇子の身になつてもやりたまへ……」〇子といふのは神奈川で